

■ 劇団員 ■



印東 一雄
声役にはかかせない。
義理人情に厚い人



佐藤 近延
休まず走り続ける70代、
表現力だけでなく馬力
もすごい。



田中 晴美
北海道と本州を行ったり
来たりの強力な助っ
人。スタッフの屋台骨



植野 慶也
実行力で初志貫徹。
腰痛に苛まれて苦戦中



佐藤 博美
芝居となると鋭い感性
を發揮。演劇大好き！
粘り強さは追従を許さ
ない



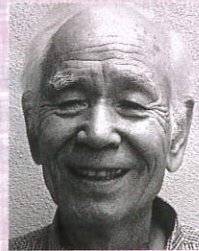
中島 晶子
お菓子作り大好き。
久々の女性役迷演乞う
ご期待。



柏木 信博
舞台美術はお手の物。
あっという間に制作、
直感力は神憑り。



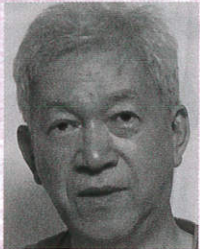
権名 志津子
他にはない個性を持っ
た演技力に脱帽。頭の
回転力も並ではない。



樗澤 加津人
佐藤近延さんとの二人
羽織は天下一品。80代
にしては気迫がすごい



清水 眞二
舞台監督として機転の
良さが頭脳明晰で頼れ
る。
頼りになる兄貴



関内 賢二
ムードメーカー。楽し
ませる事には一肌脱ぐ。
天才的なアドリブ力



米田 一江
太極拳一筋。着物の着
付けはお任せ。緑の下
の力持ち

■ あらすじ ■

ある夕方、ろう者が突然倒れ、意識不明となった。すぐそばに「AED」という救命措置の装置があるのに誰も触ろうとしない。

その日は土曜の夜であり、役所は閉まってしまい手話通訳を呼ぶ方法がなく、混乱状態に…

結局、倒れたろう者は亡くなってしまった。ろう者の友人たちは駅員の対応に納得がいかないため、千葉聴覚障害者センターの相談員に相談。

相談員が調査に乗り出したところ、いくつかの課題が浮かび上がった。

ところが、ここでタイムスリップが起き、意外な展開となってしまう。いったい何が…？

(この物語はフィクションである。)

つくも 千葉ろう者劇団九十九とは？

昭和58年1月設立、
演出、脚本、脚色、舞台美術など、ろう者自身による
芝居創造を得意とする。

日舞手話劇、民話劇、手話落語、ミュージカル劇など多
彩な演目に取り組んでおり、国内では国民文化祭に千
葉県代表として二回出演。海外は世界ろう者演劇祭典
(ヘルシンキ)に日本代表として参加。モスクワでの海
外公演は、単独劇団としては日本初。

九十九は、「百まであとひとつ…」とあくなき探求
心で取り組んでいる。

